

子供たちにスポーツの空間を！！  
～大学施設を利用した子供キャンプの提案～

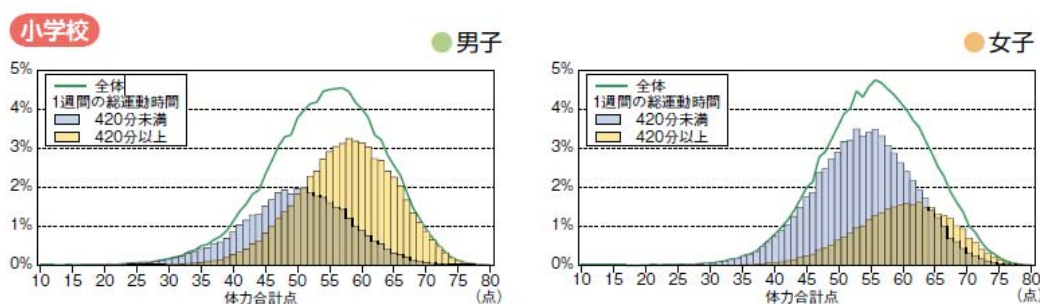
東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科 萩ゼミA

○坂元 周 名武 遼香 千葉 彩也香 小川 直美

## 1. はじめに

文部科学省の「平成 24 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書」によると、現在、小学生の体力低下傾向に歯止めがかかり、向上傾向が見られ始めたものの、体力水準が高かった昭和 60（1985）年頃と比較すると、依然低い水準になっている。一方、身長・体重など子供の体格は昭和 60 年を上回っている。このように、体格の向上がみられているのに対して運動能力が低下しているということは、体力低下の問題が深刻であることを示唆している。さらに、運動する子供とほとんど運動しない子供に分かれるという 2 極化現象が起こっており、それが体力にも反映し、大きな問題とされている。

これらの現状から、私たちは、運動をほとんどしない子供たちの体力を向上させることが体力の 2 極化を解消することであり、体力向上に繋がると考えた。



出典：「子どもの体力向上のための取組ハンドブック 第2章」（文部科学省）より

図1 1週間の総運動時間と体力合計点との関連（平成22年度）

## 2. 体力の必要性

「子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）」（2002）によると、体力は人間の発達・成長を支え、人として創造的な活動をするために必要不可欠なものであり、「生きる力」の極めて重要な要素となるものである。しかし、現実では、子供の体力は低い水準にあり、子供たちの健康への悪影響や気力の低下などが懸念されている。そして、将来的には国民全体の体力低下につながり、生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下など、心身の健康に不安を抱える人々が増え、社会全体の活力が失われる事態が危惧される。

### 3. 体力低下の原因

体力低下の原因として、以下のことが挙げられる。

- ①生活様式の変化による運動活動の「時間の減少」
- ②生活の利便化による手軽な「遊び場の減少」
- ③少子化や習い事などによる「仲間の減少」
- ④国民の外遊びや運動の重要性に関する「意識の低下」



出典：キャッチボールのできる公園

図2 -3つの間の変化「時間」「空間」「仲間」

### 4. 「子どもの家」の実例調査による子供の身体活動の実態

※「子どもの家」とは、市内に居住する小学生・中学生、市内に居住する付添人のある幼児、青少年育成関係者が利用できる施設。ログハウス（丸太小屋）作りになっており、屋内にはアスレチック施設や図書室、屋外にはちょっとした遊具もある。卓球やボードゲームなどの用具の貸し出しもしている。

(平塚市みなと子どもの家)



図1



図2

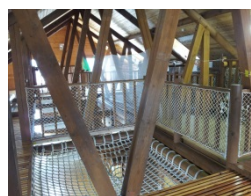


図3



図4

- ①目的：子供の実際の声聞く
- ②対象：a) 神奈川県平塚市大野子供の家を利用する子供たち  
b) 神奈川県平塚市みなと子供の家を利用する子供たち
- ③日時：a) 2013年8月20日（火）15：00～17：00  
b) 2013年8月21日（水）13：00～17：00
- ④方法：参与観察及び「子どもの家」を利用する子供たちへのインタビュー調査
- ⑤結果：【子供の様子】

- ・想像以上に子供たちは自主的に体を動かしていた。
- ・学校、年齢を超えた交友関係が築けていた。

#### 【子供の声】

- ・もっと広い場所やスポーツ用具・遊具がほしい。
- ・苦手なもの・できないものは「楽しくない」→「やりたくない」
- ・できないことは「やる気」、「向上心」につながることもある。
- ・「子どもの家」以外では学校のグラウンドや公園、駐車場などで遊ぶ。

#### 【「子どもの家」・事務局の存在】

- ・常に事務局の方がいるため、安心して子供を預けられる。
- ・事務局の方の声は子供たちが一緒に遊んだり、遊び方を工夫したりするきっかけやヒントになる。
- ・子供だけでなく、親同士のコミュニケーションの場としても活用

## ⑥考察：

「子どもの家」は、子供の成長や体力づくりに必要な「時間」、「空間」、「仲間」の3間を満たすことができている。そして、利用している子供たちにとっては生活の一部となっている。このように、安全性が確保され、子供たちが自主的な活動を行える施設は現代の社会において重要な役割を果たしている。また、子供たちが持続的な活動を行うためには、各自のレベルに合ったものを自ら選択できる環境が必要である。つまり、このような施設や環境を作り出すことが体力低下や2極化の進行を防ぐことにもつながるのではないだろうかと考えた。

しかし、新たな施設の建設や環境の整備には、各市町村の「財政状況」、「場所・人材の確保」など解決すべき課題が多く、実現することは難しい。そこで、今私たちにできることは、子供たちに体を動かすことが楽しいと思ってもらう「空間（きっかけ）」を作るのではないかと考えた。

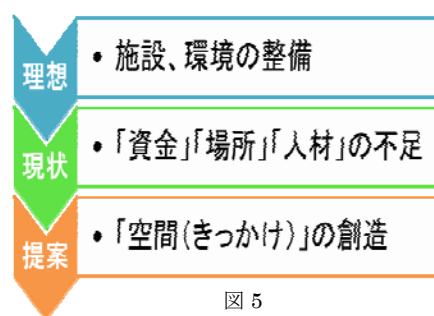


図5

## 5. 『大学施設を利用した子供キャンプ実施』の提案

### 5.1 「子供キャンプ」の定義

現在、日本のキャンプは、山や川など自然の中でテント生活をするという印象が強い。しかし、今回提案する子供キャンプは、子供たちが体を動かすことは楽しいと感じられるような空間をつくることを目的とし、身近な大学施設で集団生活をするを指す。

### 5.2 なぜキャンプなのか

- 「時間の確保」  
→運動することだけでなく、多様な活動をプログラムに組み込みやすくなり、体を動かすことが苦手な子や嫌いな子も参加しやすくなる。ことができる。
- 「集団生活による人間形成」  
→家族以外の他人との集団生活を通して、子供たちの自主性や協調性を促す。
- 「交友関係の構築」  
→同じ体験を共有することで、仲間意識を強める。

### 5.3 なぜ大学施設なのか

- 「施設や用具・人材の充実」  
→1箇所ですべてスポーツ施設、宿泊施設、食堂などの施設をまかなうことができる。  
→専門家が身近にいますのでプログラム内容のため参考意見を聞きやすい。  
→運動するための十分な環境を確保することができる。
- 「安全面の確保」  
→自らの大学で行うため事前準備がしやすく、緊急時も臨機応変に対応できる。  
→スタッフの監督下で子供たちに新しいことなどに挑戦させられる。

- ・「経費の削減」  
→既存の施設や用具を使用することで、コスト削減ができる。
- ・「地域とのつながり」  
→大学施設を利用・案内することで、大学を身近に感じる。

#### 5.4 「子供キャンプ」について

##### (1) 概要

- ・場所：大学施設（体育館やグラウンド等の運動施設及び宿泊施設など）
- ・期間：2泊3日を主とし、プログラム内容やニーズに合わせて対応していく。
- ・頻度：各長期休暇に数回の実施を目標とする。
- ・対象：小学1年生～6年生までの男女

##### (2) 具体的な内容

- ・競技スポーツではなく、体を動かすこと自体を楽しめるようなプログラムの実施（走る・跳ぶ・投げる等の基本的動作をレクリエーションや道具を用い身に付ける）
- ・様々な種目の用具を用意し、自由に多くのスポーツ体験をできる時間の確保
- ・大学施設の案内 など

##### (3) 運営方法

- ・継続的な活動を実施するため、学生が主体となる団体を創設する。
- ・団体のコーディネーター（1人）とアドバイザー（複数）は大学教職員に依頼する。
- ・主な運営費は参加者からの参加費とする。（参加費は宿泊費・食費・保険料を含む）

#### 7. まとめ

現在、子供の体力低下や2極化の問題を解決するために様々な施策が考えられているが、それ以前に解決しなければならない多くの問題がある。また、それらの取り組みには地域によって格差が生じている。それらの問題を社会全体で解決していく必要性を訴え続けていくために、恵まれた環境を所有する大学が先頭に立って、子供たちに本提案のような機会やきっかけを作っていく。それが今の私たちにできることであり、それらの問題や地域に貢献することが大学に求められる姿である。それは地域との連携を強めることであり、子供たちの成長や体力向上のためのより良い環境づくりに繋がるのではないかと考える。

#### 8. 参考文献

- ・文部科学省（2012）『子どもの体力向上のための取組ハンドブック』
- ・文部科学省（2002）『子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）』
- ・文部科学省（2013）『平成24年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書』
- ・笹川スポーツ財団（2010）『子どものスポーツライフ・データ』
- ・『キャッチボールができる公園づくり』 <http://www.posa.or.jp/catchball/purpose03.html>
- ・『CHILD RESEARCH NET』 <http://www.blog.crn.or.jp/report/02/65.html>